

社会貢献目標が社会的リスクテイキング行動を抑制する メカニズムに関する研究

研究代表者

東京理科大学 教育支援機構教職教育センター 西村 多久磨

研究の目的

なぜ人は、危険だとわかっていながら、危険な行動をとってしまうのだろうか。「喫煙や過度な飲酒などの健康を害する行為」、「危険な運転」、「歩きスマホ」「駆け込み乗車」などは、その危険性が十分に理解されていたとしても、実際には回避されない場合がある。心理学では、これらの危険な行動を総称して「社会的リスクテイキング行動」と呼ぶ。

本研究では、20 歳前後の青年が社会的リスクテイキング行動を取りやすいという社会問題を踏まえ、心理学の研究手法に準じた以下 3 つの研究を通して、リスクテイキング行動の予防に繋がる研究知見の発信を目指している。研究 1 では、現代の社会環境をふまえた社会的リスクテイキング行動を網羅的に把握する。研究 2 では、「社会貢献目標（社会地域の発展に貢献したいという人生の目標）」というポジティブな個人的特性（人の傾向）に注目し、質問形式の調査によって、この社会貢献目標が社会的リスクテイキング行動を抑制する可能性を確認する。そして研究 3 では、社会貢献目標の特徴とされる「社会との繋がり」と「時間的展望」を教育的介入によって操作し、社会貢献目標が社会的リスクテイキング行動を抑制する効果およびそのメカニズムを明らかにする。

研究 1 社会的リスクテイキング行動リストの作成

社会的リスクテイキングに関する研究は、海外では 1970 年代から始められ、日本で本格的に研究が開始されたのは 1990 年代である。すでに 30 年以上にわたって研究知見が蓄積されてきた研究テーマではあるが、研究上の課題が今なお存在している。その 1 つが、これまでの研究では犯罪や薬物乱用、自傷行為などのネガティブ強度のかなり高い行動が中心に取り上げられており、我々の日常で良く起こり得る社会的リスクテイキング行動に焦点が当てられていないという課題である。小塩（2001）は同様の理由から、我々の日常生活に根差したリスクテイキング行動尺度（リスクテイキング行動の取りやすさを測定する質問項目）を開発したが、すでに開発から 20 年以上が経過した。現代において青年を取り巻く社会環境は著しく変わっており、この変化に心理学研究が十分に対応しきれているとは言い難い。

そこで研究 1 では、青年だけではなく幅広い年代から社会的リスクテイキング行動を収集し、改めて日常生活に潜んでいる社会的リスクテイキング行動を整理することを目的とする。

方 法

日常生活に潜む社会的リスクテイキング行動を把握するにあたって、まずは大学生 20 名を対象に質問紙調査を行い社会的リスクテイキング行動の収集を試みたが内容に著しい偏りが見られてしまった。そのため調査専門会社（GMO リサーチ&AI）に調査を依頼し、幅広い年代（303 名：平均年齢 45.8【範囲：20—69】歳）から社会的リスクテイキング行動を収集した。この調査における教示文は「あなたが経験した危険な行動、あるいは見たり聞いたりした危険な行動を教えてください」とし、一人あたり 2 個から 5 個程度の記述を求めた。

結 果

調査によって 915 個（一人あたり 3.02 個）の記述が収集された。次にこれらの記述に対して内容分析を行い、KJ 法の手法を参考に分類を行った。その結果、以下に示す 9 つのカテゴリーが抽出された。まず、「安全軽視行動（270 個：29.5%）」は今回の調査で最も回答の多かったカテゴリーであり、その具体的な行動として「スマホ歩き」や「駆け込み乗車」、「信号無視」などが挙げられた。次いで多く得られた回答は、「健康障害行動（158 個：17.3%）」であり、「過食・過飲」や「過度の喫煙」「激しい運動」などが具体的な行動として挙げられた。以下、具体的な行動例は紙面の都合上割愛するが、回答数が多い順に「運転リスク行動（156 個：17.0%）」「衝動的な金銭行動（72 個：7.9%）」「犯罪行為（71 個：7.8%）」「インターネットリスク行動（47 個：5.1%）」「マナー違反・迷惑行為（47 個：5.1%）」「スリル希求行動（47 個：5.1%）」「スキャンダル（11 個：1.2%）」であった。

表 1 には具体的な項目例と予想されるリスクを示した。「安全軽視行動」は事故によるケガ等、「健康障害行動」は健康被害、「運転リスク行動」は交通事故、「衝動的な金銭行動」は金銭トラブル、「犯罪行為」は犯罪（刑事罰の対象）、「インターネットリスク行動」は、インターネット関連のトラブル、「マナー違反・迷惑行為」は非常識な人と見做されること、「スリル希求行動」は深刻なケガ・事故等、そして「スキャンダル」は社会的評価の低下といった社会的リスクが想定された。

表 1 社会的リスクテイキング行動に関する自由記述（分類の結果）

カテゴリ名	記述数（割合）	項目例	予想されるリスク
安全軽視行動	270（29.5%）	歩きスマホ、駆け込み乗車、信号無視	事故によるケガ等
健康障害行動	158（17.3%）	過食・過飲、過度の喫煙、激しい運動	健康被害
運転リスク行動	156（17.0%）	スピード違反、危険運転、煽り運転	交通事故
衝動的な金銭行動	72（7.9%）	騒動買い、ゲームへ課金、ギャンブル	金銭トラブル
犯罪行為	71（7.8%）	薬物使用、暴力行為、万引き	犯罪（刑事罰の対象）
インターネットリスク行動	47（5.1%）	個人情報の漏洩、フィッシング詐欺	インターネット関連のトラブル
マナー違反・迷惑行為	47（5.1%）	ゴミの投げ捨て、無断欠勤・遅刻、過度なクレーム（カスタマーハラスメント等）	非常識な人と見做される
スリル希求行動	47（5.1%）	山登り、川泳ぎ、不要不急の外出	深刻なケガ・事故等
スキャンダル	11（1.2%）	不倫、浮気、家庭内暴力	社会的評価の低下
その他・分類不能	36（3.9%）		

考 察

本研究によって抽出された安全軽視行動や健康阻害行動、運転リスク行動、衝動的金銭行動、スリル希求行動などは、海外の研究においても注目されてきた、いわば普遍的な社会的リスクテイキング行動であり、本研究の結果もこの流れを踏襲した形になっている。日常生活において起こり得る多様な行動が収集されたという点において、現代の社会環境をふまえた社会的リスクテイキング行動を把握するという本研究の目的は十分に達成されたと考えられる。

また、本研究で抽出された社会的リスクテイキング行動は、身体的リスク（事故・ケガ）、経済的リスク（金銭トラブル）、社会的リスク（信用・評価の低下）といった複数の次元から分類することができる。従来は、身体的リスクや経済的リスクについて多くの関心が寄せられていたが、「スキャンダル」だけではなく「マナー違反・迷惑行為」を他者からの否定的評価や社会的信用の失墜を社会的なリスクとして認識している点は、社会的リスクテイキング研究に新たな視座を与えている。これは、個人の健康や経済的損失だけでなく、社会的評価を守ること自体が、社会的リスクテイキング行動を取らないという選択の規定因になり得ることを示唆している。この結果は、日本社会に特有の規範意識や、対人関係における調和を重んじる文化的背景が反映されたものであると考えられる。

以上より、現代における日本社会のリスクテイキング行動を、従来よりも包括的に抽出し、日本の文化的特徴と合わせて整理できた。この点に、本研究における学術的な貢献があると考えられる。

研究2 社会貢献目標と社会的リスクテイキング行動との関係

自己決定理論（Ryan & Deci, 2017）によると、個人のウェルビーイングにおいて人の基本的心理欲求の充足がその条件に挙げられており、この基本的心理欲求を満たしやすい個人的特性の一つとして社会貢献目標が注目を集めている。社会貢献目標とは自身の人生において地域社会の発展に重きを置く人生価値観のことであり、社会貢献目標のような人のポジティブな特性は、青少年の健やかな成長や発達において欠かせない要因と想定されている（Bendon, 2007）。実際に、我が国でも社会貢献目標を持つ子どもほど、学校生活に満足していたり、向社会的行動を行っていたりしていることが示唆されている（西村・村上・鈴木・中山・櫻井, 2017）。

そこで研究2では、研究1の結果を踏まえて社会的リスクテイキング行動のリストを作成し、社会貢献目標との関連を調べることを目的とした。本研究では社会貢献目標を有する個人ほど社会的リスクテイキング行動を取らないことを予想する。この予想の根拠となるメカニズムは次のとおりである。すなわち、社会貢献目標というポジティブな特性を持つ個人は、自身の人生において社会貢献という目標（社会とのつながりを重視する傾向）を持つため、社会生活において様々なリスクを包含する行動を取ることは慎重になる傾向にあると考えられる。また、自らを社会集団の一員として位置づけるがために、社会規範からの逸脱を示唆する行動、すなわち社会的リスクテイキング行動を回避しようとするだろう。

したがって、この予想が正しいのであれば、社会貢献目標と社会的リスクテイキング行動との間には負の相関関係がみられるはずである。この予想を研究2の仮説とする。

方 法

インターネット調査会社の株式会社マクロミルに調査の実施を委託した。

調査対象 株式会社マクロミルのモニターから日本全国の成人を対象に調査協力を募集し、416名（男性 208 名、女性 208 名；平均年齢 39.96 [範囲：20–59] 歳）から回答が得られた。年齢別の内訳は 20 代、30 代、40 代、50 代の順にそれぞれ 104 名（男性 52 名、女性 52 名）であった。

調査内容 調査は以下の内容から構成された。

(1) **デモグラフィック**：基本情報として、性別、年齢、住まい（都道府県）、学歴、個人年収、結婚歴、子どもの有無、職業、離職経験等を尋ねた。

(2) **社会的リスクテイキング行動**：研究 1 の結果をふまえ、60 項目から構成される社会的リスクテイキング行動のリストが作成された。想定されたカテゴリーは「安全軽視行動（10 項目）」「健康阻害行動（11 項目）」「衝動的金銭行動（9 項目）」「対人リスク行動（10 項目）」「マナー違反行動（10 項目）」「スリル希求行動（10 項目）」であった。社会的リスクテイキング行動のリストには、当初は「運転リスク行動（10 項目）」を用意していたが、これらの項目の回答自体が犯罪履歴となる可能性が高いことから株式会社マクロミルからの実施許可が得られなかった。この理由のため、犯罪行為やスキャンダル、さらには犯罪が疑われる可能性の高いインターネットリスク行動等も今回の調査ではリストには含めなかった。ただし、本研究では、あくまで日常生活に潜む社会的リスクテイキング行動に注目しているため、犯罪の証左と成り得る項目を扱う必要はなく、これらの項目をリストから除外することに大きな問題はないと判断した。今回の調査で用いた 60 項目については、本報告書の最終頁にて公開している（付録 A）。

実施にあたっての教示文は「この設問では、ここ 3 カ月であなたが経験したことについてお尋ねします。以下に書かれていることを経験したことはありますか？それぞれの項目に対して経験がない場合は、0（なかった）を選択してください。もし、経験があった場合は、どの程度経験したかをお尋ねします。自分の気持ちに近い数字を一つずつ選んでください」であり、まず該当する社会的リスクテイキング行動をとったか否か（0 点＝しなかった、1 点＝した）を尋ねた。そして該当する行動をとった場合は、その頻度について 5 段階評価（1 点＝少しだけあった、2 点＝まあまああった、3 点＝けっこうあった、4 点＝かなりあった、5 点＝とてもたくさんあった）で回答を求めた。

(3) **社会貢献目標**：将来目標尺度（Nishimura, 2024）を実施した。この尺度は、自己決定理論で想定されている人生目標を網羅的に測定することを目的として開発されたものであり、この尺度の一部に社会貢献目標の項目が含まれている。今回の調査では、この尺度を構成する 28 項目すべてを尋ねており、「社会貢献（例：将来、困っている人を助けること）」の他に「自己受容（例：将来、自分自身の人生に責任を持てるようになること）」「親密性の獲得（例：将来、あなたのことを気にかけて、支えてくれる人がいること）」「身体的健康（例：将来、自分が元気で暮らせること）」「金銭的成功（例：将来、ぜいたくなものをたくさん買うこと）」「外見的魅力（例：将来、服装や髪型などの最新の流行についていくこと）」「社会的名声（例：将来、有名になること）」の 6 つの目標も解析に用いることとした。教示文は「この設問では、あなたが自分自身の人生において、どのようなことを重視しているかを尋ねています。以下に書かれている項目が、あなたにとって、どのくら

い重要かどうかを、自分の気持ちに近い数字を1つずつ選んでください」とし、5段階評定（1点＝まったく重要ではない、2点＝少し重要だ、3点＝やや重要だ、4点＝かなり重要だ、5点＝非常に重要だ）で回答を求めた。すなわち、本研究では、人生目標を重要度（価値に重きを置いているか）の観点から測定した。

（4）その他：社会的リスクテイキング行動リストの妥当性を確認するために、日本語版 BIS/BAS 尺度、バランス型望ましき尺度、利益最大化傾向尺度を実施したが、本報告書における分析には使用しなかった。

倫理的配慮 調査の実施にあたって、調査への協力は強制ではなく、いつでも途中で回答を中断できること等、倫理面に関する説明がなされた。その上で、調査への協力が可能な場合は、調査協力への同意を求めた。今回の調査では同意のあった回答者のみが上記の調査内容に回答している。以上の手続きについては、東京理科大学の研究倫理審査を受け、承認を得た（承認番号 25010）。

結 果

解析は次の手順で行うこととした。まず、（1）社会的リスクテイキング行動リストに対する基本的な分析を行い、平均値や標準偏差等の基本情報を、サンプルの年齢層をふまえて公開する。その後、（2）社会的リスクテイキング行動と社会貢献目標との相関関係を分析する。

社会的リスクテイキング行動リストに対する基本的な分析 まず、社会的リスクテイキング行動リストに含まれる項目に対しては「しなかった（0点）」という回答が多く、当該行為を経験した人でも「少しだけあった（1点）」という回答がほとんどであった。そこで以降は、社会的リスクテイキング行動リストの各項目に対しては二値データと見做し、合算得点をそれぞれの尺度得点として扱うこととした。「安全軽視行動」「健康阻害行動」「衝動的金銭行動」「対人リスク行動」「マナー違反行動」「スリル希求行動」の平均値と標準偏差および尺度得点間の相関関係を表2に示した。

各社会的リスクテイキング行動の平均得点を示したものを図1に示した。この年代別の平均得点を比較するために、各社会的リスクテイキング行動を従属変数、調査参加者の年齢（20代、30代、40代、50代）を独立変数とした一要因分散分析を行なった。これらの分散分析の結果を表3に示した。傾向として、50代のサンプルの得点が低く、20代サンプルの得点が高いことが確認されたが、20代サンプルの得点が高他の年代サンプルよりも突出して低いという結果は得られなかった。

表2 社会的リスクテイキング行動の平均値と標準偏差および下位尺度間の相関関係

	平均値	標準偏差	得点範囲	①	②	③	④	⑤
① 安全軽視行動	3.73	2.99	[1 — 10]					
② 健康阻害行動	4.17	3.13	[1 — 11]	.75				
③ 衝動的金銭行動	2.33	2.65	[1 — 9]	.75	.80			
④ 対人関係リスク行動	2.44	3.17	[1 — 10]	.73	.78	.81		
⑤ モラル・マナー違反行動	2.13	2.98	[1 — 10]	.79	.81	.86	.86	
⑥ スリル希求行動	2.09	3.04	[1 — 10]	.76	.80	.85	.87	.90

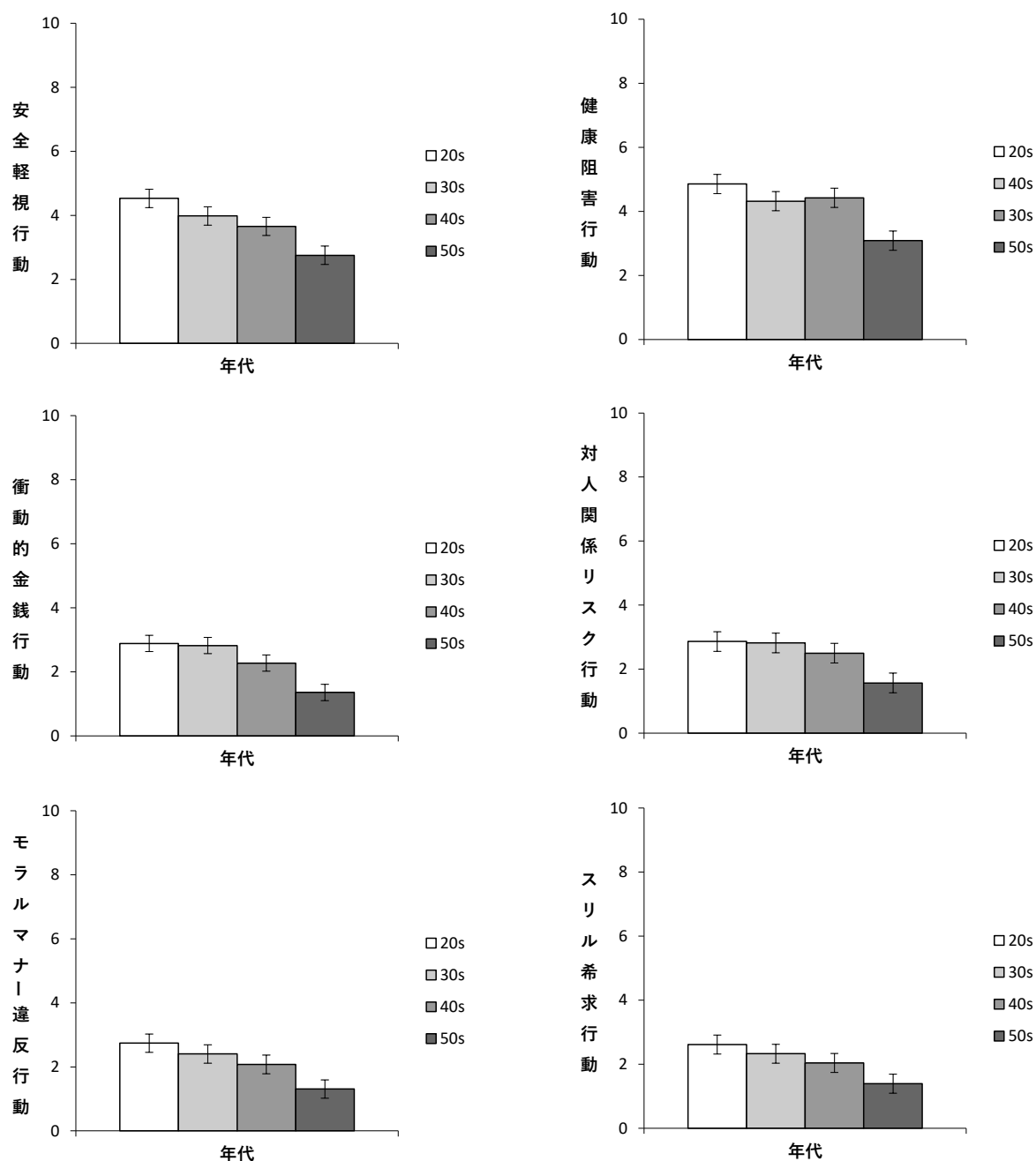


図1 社会的リスクテイキング行動の年代別平均得点（エラーバーは標準誤差）

社会的リスクテイキング行動と社会貢献目標との関連 次に、社会的リスクテイキング行動と社会貢献目標との関連を検討するために各社会的リスクテイキング行動を目的変数、将来目標を説明変数とする重回帰分析を行なった。結果を表4に示した。各社会的リスクテイキング行動に対して「社会的名声」は一貫して正の関連が、また「身体的健康」は負の関連が確認された。その一方で、「社会貢献」と「社会的リスクテイキング行動」との間に、5%水準で有意な関連は確認されなかった。すなわち、研究2の「社会的リスクテイキング行動と社会貢献目標との間には負の相関関係が見られる」という仮説は支持されなかった。

表3 社会的リスクテイキング行動の年代別得点（平均と標準偏差）および分散分析の結果

	20s		30s		40s		50s		分散分析の結果		
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F</i>	<i>p</i>	多重比較
安全軽視行動	4.53	3.13	3.98	2.99	3.65	3.04	2.75	2.50	6.76	<.001	50s < 20s, 30s
健康阻害行動	4.86	3.45	4.42	3.27	4.32	2.93	3.09	2.57	6.35	<.001	50s < 20s, 30s, 40s
衝動的金銭行動	2.88	2.89	2.82	2.78	2.27	2.60	1.36	2.00	7.73	<.001	50s < 20s, 30s, 40s
対人関係リスク行動	2.87	3.46	2.82	3.22	2.50	3.20	1.57	2.59	3.84	.010	50s < 20s, 30s
モラル・マナー違反行動	2.74	3.20	2.40	3.16	2.08	2.96	1.31	2.39	4.50	.004	50s < 20s, 30s
スリル希求行動	2.62	3.33	2.33	3.23	2.04	3.00	1.39	2.40	3.13	.026	50s < 20s

注) 各年代の人数は104人（男性52名，女性52名）

表4 重回帰分析の結果：社会的リスクテイキング行動と社会貢献目標との関連

	安全軽視行動		健康阻害行動		衝動的金銭行動		対人関係リスク行動		モラル・マナー違反行動		スリル希求行動	
	β	r	β	r	β	r	β	r	β	r	β	r
自己受容	.00	(.02)	.06	(.02)	-.01	(-.04)	.06	(-.01)	-.02	(-.06)	-.04	(-.05)
親密性の獲得	-.03	(-.02)	-.09	(-.06)	-.12	(-.13)	-.10	(-.10)	-.11	(-.14)	-.08	(-.10)
社会貢献	-.03	(.16)	.02	(.17)	.02	(.16)	.05	(.19)	.07	(.19)	.08	(.21)
身体的健康	-.13 *	(-.16)	-.14 *	(-.18)	-.19 **	(-.27)	-.20 **	(-.25)	-.17 **	(-.28)	-.18 **	(-.27)
金銭的成功	.11	(.32)	.15 *	(.31)	.19 **	(.37)	.16 **	(.34)	.16 **	(.37)	.09	(.33)
外見の魅力	.09	(.24)	.02	(.20)	.07	(.22)	-.02	(.19)	-.03	(.19)	.05	(.22)
社会的名声	.29 **	(.41)	.23 **	(.37)	.26 **	(.45)	.28 **	(.44)	.36 **	(.50)	.34 **	(.48)
決定係数 (R^2)	.19 **		.17 **		.27 **		.24 **		.31 **		.27 **	

** $p < .01$, * $p < .05$

考 察

まず、社会的リスクテイキング行動の回答傾向を確認したところ、度数分布には大きな偏りが見られ、二値データとして扱うことの正当性が確認された。その上で、各社会的リスクテイキング行動得点の傾向を確認した結果、年齢層の低いサンプルほど社会的リスクテイキング行動を行いやすいことが示された。もっとも、本研究では20代サンプルが特に突出して高い得点を示すといった結果は得られなかったものの、50代サンプルと比較した際には、20代サンプルにおける社会的リスクテイキング行動の取りやすさは示されたと考えられる。このことは、先行研究が報告してきた「青年期から成人初期にかけて社会的リスクが顕在化する」という一般的な傾向と概ね一致しており、本研究の結果が一定の妥当性を有することを裏づけている。

その一方で、社会的リスクテイキング行動と社会貢献目標との間に予想された明確な負の関連は確認されず、研究2の仮説は支持されなかった。この結果についてはいくつかの可能性が考えられるが、この考察では社会貢献目標の測定方法に改良の余地があることについて言及しておきたい。

本研究では「重要度」という側面から社会貢献目標を測定したが、社会貢献が重要か否かという個人の主観的評価は、その後の行動を規定する力としては弱いかもしれない。実際、個人がそれを実際にどの程度「達成可能」だと捉えているか、あるいは「日常生活でどの程度達成できているか」といった別次元を考慮した測定も自己決定理論では考案されており（西村, 2019）、「達成可能性」による測定の導入も検討すべきである。

社会的リスクテイキング行動リストそのものの妥当性に関しては、むしろ支持的な結果が得られた。具体的には、将来目標の一つである「身体的健康」と社会的リスクテイキング行動との間に負の相関関係が確認された。この知見は、自己の身体を大切にす志向性が強い個人ほど社会的リスク行動を回避しやすいことを意味している。加えて、若年層の方が、社会的リスクテイキング行動得点が高いという年齢差のパターンも、既存の行動科学的知見と整合していることから、社会的リスクテイキング行動の構成概念妥当性は一定程度、支持されていると考えられる。

これらの結果をふまえ、続く研究3では、社会貢献目標の測定の仕方を工夫し、社会貢献目標が社会的リスクテイキング行動を抑制するメカニズムの解明を目指すことにした。

研究3 社会貢献目標が社会的リスクテイキング行動を抑制する効果の検証

研究2では、予想に反して、社会貢献目標と社会的リスクテイキング行動との間に負の相関関係が確認されなかった。ただし、この結果をもって、社会的リスクテイキング行動の抑制と社会貢献目標は無関係であると結論づけるのは早計である。そこで研究3では、教育的介入によって社会貢献目標を操作し、その結果として社会的リスクテイキング行動が抑制され得るかを検証した。

社会貢献目標を操作する方法としては、社会貢献に関する道徳的推論を促す集団討論や、社会貢献活動への参加体験など多様な介入方法が提案されている。その中で本研究では、現実的な教育場で実施可能性の高い筆記課題を採用した。具体的には、研究参加者に自分の就きたい職業を一つ挙げてもらい、その職業が社会に果たす役割や社会に対する貢献について調べたうえで、それを文章化する課題を考案した。この課題は将来の自己像と社会的価値を結びつけて考えることを促す点で、またその職業を媒体とした社会貢献の実現可能性を知ることによって、社会貢献目標を高める有効な方法であることが想定された。また、この研究3では、研究2の課題を鑑み、社会貢献目標を「重要度」と「達成可能性」から測定する評価方法を導入した。

この教育的介入によって、社会貢献目標が高くなった個人は社会的リスクテイキング行動をとらなくなることが予想される。なぜならば、他者や社会に悪影響を及ぼしかねない社会的リスクテイキング行動は、社会貢献という使命や自らに今後課せられる社会的役割や責任感と矛盾するものとして認知されやすくなるからである。したがって、この論理によって、社会貢献目標が高まった個人ほど、社会的リスクテイキング行動を抑制する傾向を示すという仮説が導かれる。

方 法

研究代表者が担当する教職概論という大学の授業で介入を行なった。この研究の仮説は教育的介入によって社会貢献目標が向上し、社会的リスクテイキング行動が低下するというものである。統制群は設けず、被験者（研究協力者）内計画による検討を行った。

研究協力者 大学生 49 名（男性 44 名、女性 5 名）が対象となり、調べ学習と筆記課題を組み合わせによる介入が実施された。

手続き 本研究における手続きについては、介入前と介入時、そして介入後に分けて説明する。

（１）介入前：授業時間中に今回の研究に関する説明を行い、研究協力を呼び掛けた。その際、介入研究への参加は任意であり、不参加の場合でも授業での評価が下がるなどの不利益は被らないことなどが説明された。その後、研究協力者はオンラインから Microsoft Forms で作成したアンケートにアクセスして、Nishimura (2024) の将来目標尺度を構成する社会貢献目標（４項目）と外発的将来目標（４項目）に関する項目に回答した。外発的将来目標とは自分の人生において金銭的な成功や社会的名声の獲得を目指す人生価値観であり、社会貢献目標と対比されるものである。この外発的将来目標を測定する理由は、本研究で実施する介入が社会貢献目標の向上に対してのみ効果があったかどうかを調べるためである。今回は、それぞれの項目に対する重要度を 5 段階評定（１点＝まったく重要ではない、２点＝少し重要だ、３点＝やや重要だ、４点＝かなり重要だ、５点＝非常に重要だ）で尋ねると同時に、その達成可能性についても尋ねることとした。教示文は、「将来にわたって、下記のこととはどのくらいの確率で達成できそうか回答してください」とし、5 段階評定（１点＝0%、２点＝25%くらい、３点＝50%くらい、４点＝75%くらい、５点＝100%）で尋ねた。

（２）介入時：アンケートへの回答から 1 週間後に課題が提示された。まず、「今、現在、あなたが将来就きたいと考えている職業は何ですか」と質問し、回答を求めた。そしてここで回答した職業について「その職業が社会に対してどのような貢献をしているのか、また社会における重要性等を調べて、600 字から 800 字程度で記述してください」と教示し、回答を求めた。

（３）介入後：さらに一週間後に、再び Nishimura (2024) の将来目標尺度から社会貢献目標と外発的将来目標に関する同項目について評定を求めた。介入前の測定と同様に重要度と達成可能性について尋ねた。さらに、研究 2 で作成した社会的リスクテイキング行動リストから、「健康阻害行動（11 項目）」を選択し、これらをこの 1 週間の間で行ったかどうかを尋ねた。今回の調査では、2 段階評定（０点＝しなかった、１点＝した）で回答を求めた。今回の研究では、研究協力者の負担を考慮し、健康阻害行動のみを測定した。

結 果

解析は次の手順で行うこととした。まず（１）調べ学習と筆記課題による介入の効果を確認するために、介入前と介入後の社会貢献目標および外発的将来目標得点の変化を確認する。そしてその後、（２）社会貢献目標の変化と社会的リスクテイキング行動（健康阻害行動）との関連を検討する。

介入の成果 本研究で測定した変数について、重要度の観点から測定した社会貢献目標の平均値（標準偏差）は、介入前が 3.75 (0.95)、介入後が 3.74 (0.95) であった。また重要度の観点から測定した外発的将来目標の平均値（標準偏差）は介入前が 2.36 (0.71)、介入後が 2.20 (0.69) であった。さらに、達成可能性の観点から測定した社会貢献目標の平均値（標準偏差）は、介入前が 3.14 (0.91)、介入後が 3.35 (0.91) であった。最後に達成可能性の観点から測定した外発的将来目標の平均値（標準偏差）は、介入前が 2.34 (0.74)、介入後が 2.30 (0.72) であった。これらの結果をまとめたものを図 2 に示した。

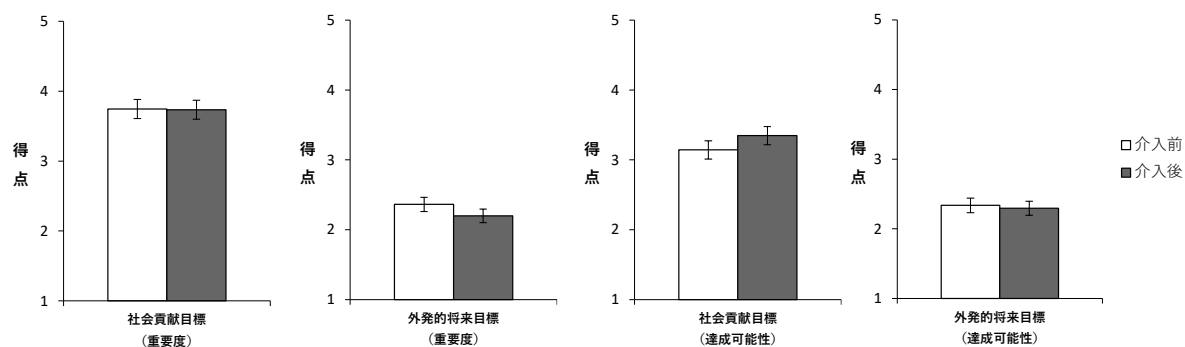


図2 介入前後における社会貢献目標および外発的将来目標の平均得点（エラーバーは標準誤差）

次に、調べ学習と筆記課題を組み合わせた介入の効果を確認するために、対応のある t 検定を行った。この際、検定が繰り返されてしまうため、5%水準で有意性の判定ができるよう p 値を Bonferroni 補正した。その結果、達成可能性による評定で測定した社会貢献目標においてのみ介入の効果が確認され、介入後の得点の方が介入前よりも高くなっていた ($t [48] = -2.75$ 、 $p = 0.03$ 、Cohens' $d = 0.39$)。その一方で、重要度による評定で測定した社会貢献目標 ($t [48] = -0.23$ 、 $p = 1.00$ 、Cohens' $d = -0.03$) および外発的将来目標 ($t [48] = -2.04$ 、 $p = 0.18$ 、Cohens' $d = -0.29$)、また達成可能性で測定した外発的将来目標 ($t [48] = -0.69$ 、 $p = 1.00$ 、Cohens' $d = -0.09$) に対しては有意水準 5%での得点の変化は確認されなかった。したがって、本研究で実施された調べ学習と筆記課題を組み合わせた介入は、達成可能性の観点から評定された社会貢献目標の向上に特化した効果があることが示された。

社会貢献目標の変化と社会的リスクテイキング行動との関連 調べ学習と筆記課題による介入により、達成可能性の観点から測定された社会貢献目標の得点は高くなったが、介入前と介入後の変化得点（介入後から介入前の差を引いた得点）を算出し、社会的リスクテイキング行動（健康阻害行動）との関連を調べた。その結果、両者の関連は、 $r [47] = .130$ ($p = .373$) であり、社会貢献目標が社会的リスクテイキング行動を抑制するというを示唆する結果は得られなかった。

考 察

本研究で考案された調べ学習と筆記課題を組み合わせた介入によって、社会貢献目標の「達成可能性」が向上したことは重要な知見である。なぜならば、教育的な文脈においてこれらの方法を用いるだけでも、学生の目標意識を変容させ得ることを意味しているからである。すなわち、将来就きたい職業を社会的価値と結びつけて考えさせることは、学生自らが希望する職業を「個人的な希望」としてだけでなく、「社会的に意味をもつ目標」として認識し直す契機となり得るのであろう。特に、「重要度」ではなく、「達成可能性」が向上した点に注目すべきである。これは、将来の職業的役割が現実的に達成可能であると学生自身が感じられるようになったことを意味しており、教育的介入が実現可能性の認識を支える側面を持つことを示しているといえる。しかしながら、今回の検討においても、社会貢献目標の向上が社会的リスクテイキング行動（健康阻害行動）の抑制に直結するという仮説は支持されなかった。この原因として以下3つの可能性について言及する。

第一に、今回の介入がもたらした効果は主として認知的な水準にとどまっており、実際の行動選択に波及するほどの力を持たなかった可能性がある。社会的リスクテイキング行動は、短期的な快楽や習慣、周囲の様子といった多様な要因による影響を受けると考えられるため、単発的な介入による認知的変容が行動抑制に直結するとは考えづらい。むしろ、責任感や感謝、思いやりといった道徳的感情などの媒介要因を含むメカニズムを想定した検討が必要であろう。

第二に、本研究で測定した社会的リスクテイキング行動が「健康阻害行動」という限定的な側面に絞られていた点も、関連が見られなかった一因として考えられる。健康阻害行動は、喫煙や飲酒、睡眠不足など、必ずしも社会貢献目標と直接的に反する行動ではない場合がある。例えば「社会のために貢献したい」という目標が強くても、個人の習慣や身体的欲求に根差した健康阻害行動には影響を及ぼしにくい可能性がある。これに対し、対人関係におけるリスク行動や規範を逸脱するような行動は、社会的責任や役割意識とより強く結びついている可能性がある。そのため今後は、社会的リスクテイキング行動をより多面的に捉え、社会貢献目標との関連を精査する必要がある。

第三に、介入から行動測定までの期間が短期間であった点も無視できない。介入直後に社会貢献目標が高まったとしても、それが行動に転化するには一定の時間的経過が必要である。短期的には認知レベルでの変化しか現れず、行動への影響を観察できなかった可能性がある。長期的に追跡すれば、社会貢献目標の高さが徐々に行動の自己統制や選択に影響を及ぼす様子が確認できるかもしれない。研究デザインの全面的な見直しは必須である。

これらの点を総合すると、本研究は教育的介入によって社会貢献目標を高めることは可能であることを示した一方で、その効果が実際の行動に及ぶまでには、さらなる研究デザインの工夫が必要であることを示唆している。また、行動レベルでの変化を引き出すためには、今回のような一度きりの介入にとどまらず、継続的な振り返り活動を組み合わせる必要があるだろう。こうした実践的工夫を重ねることで、社会貢献目標が社会的リスクテイキング行動のような具体的な行動にまで影響を及ぼすようになる、その可能性は高くなると考えられる。

総合考察

本研究は、社会的リスクテイキング行動を網羅的に捉え、その規定因として社会貢献目標が果たす役割を検討した。従来の社会的リスクテイキング研究は、健康リスクや経済リスクといった領域に偏りがちであったが、研究1を通して、本研究では新たに日常生活に潜む社会的リスクテイキング行動に焦点を当て、その行動特性を体系的に整理する新たな視座を提供することができた。その中でも、特に本研究で明らかとなった「モラル・マナー違反」という社会的リスク行動のカテゴリーは注目に値する。このカテゴリーは、日本社会に根付く規範意識や、対人調和を重視する文化的背景を色濃く反映していると考えられる。すなわち、他者からの否定的評価や集団からの逸脱が、個人にとって重大なリスクとして認識され得るという点は、欧米文化圏では必ずしも強調されない特徴である。以上の点から、社会的リスクテイキングには一定の普遍性と文化依存性の双方が存在することが示唆される。今後は異文化間比較を通じて、文化的要因が社会的リスクテイキング行動の出現や評価に及ぼす影響を体系的に検討する必要があるだろう。例えば、欧米文化圏においては

「自己主張」や「意見の相違」が必ずしもリスクとは捉えられないのに対し、日本においては対人調和の破綻がリスクとして強調されやすいのかもしれない。この違いを明らかにすることは、国際的な心理学研究の発展にも資するものである。研究2によって公開された社会的リスクテイキング行動のリストの提出は、この一歩として大きな学術的貢献をもたらしたものと評価できる。

実践的観点からは、研究3によって一部示唆された社会貢献目標を高める介入方法の有効性が特筆される。本研究で実施した「職業とその社会的役割・社会貢献を関連づけて考える筆記課題」は、キャリア教育の枠組みにおいて、若者の社会的責任を涵養する方法の一つになろう。このような取り組みは、単に進路選択を支援するに留まらず、持続可能な社会形成に必要とされる市民教育や道徳教育とも接続し得る。特に近年、教育現場では「公共性」や「協働性」の育成が重視されており、社会貢献目標の育成が、子どもの望ましい社会的行動の促進につながることを期待される。

しかしながら、研究2および研究3から、本研究の中心的議題であった「社会貢献目標が社会的リスクテイキング行動を抑制する効果」は確認されなかった。この結果については、すでに各研究にて十分な考察を行ったためここでは割愛するが、社会貢献目標と社会的リスクテイキング行動との関連については仮説生成の段階からの見直しが求められるであろう。また、効果を検出する研究デザイン（検討の仕方）についても再検討しなければならない。その一方で、社会的リスクテイキング行動の抑制を第一に考える実践的な視座からは、社会貢献目標の役割を再考するという方策も検討に値するだろう。これは研究2で明らかにされたとおり、身体的健康目標と社会的リスクテイキングとの間には負の相関関係が、また外発的将来目標のうち「社会的名声」とは正の相関関係が確認されたことから、むしろ、これらの変数に対する教育的介入を通して、社会的リスクテイキング行動の抑制を目指す方が合理的であるという見方もできるからである。本研究においては、当初の仮説は支持されたわけではなく、社会的リスクテイキング行動の抑制という教育的課題は残ってしまった。改善点などを慎重に吟味し、これらを今後の研究に活かしていく必要がある。

もっとも、本研究にはいくつかの限界が存在する。第一に、介入効果の検証が短期的にとどまっており、社会貢献目標の高まりが時間を経ても持続するのか、あるいは実際の行動に長期的な影響を与えるのかについては、未解明である。縦断的研究やフィールド実験を通じて、長期的効果の有無を明らかにすることが求められる。そして第二に、本研究では主に自己報告式の測定を行ったため、社会的望ましきバイアスの影響を受けた可能性を否定できない。特に、介入研究を実施した研究3の対象者は、授業を受講していた大学生であり、倫理的な手続きを踏まえた実践を行なったものの、完全にその影響を統制できたわけではない。今後は行動指標や実験的な操作を組み合わせ、より多角的に社会的リスクテイキング行動を測定することが望まれる。

今後の展望としては、上記の研究課題の解決に従事するとともに、まず青年期における研究の拡張が挙げられる。青年期は価値観や社会的役割意識が急速に形成される重要な発達段階であり、この時期に社会貢献目標を高める教育的介入を行うことは、発達心理学的にも教育心理学的にも大きな意義を持つ。特に中学生や高校生を対象にした介入研究を進めることで、教育現場に直結する知見を得ることができだろう。さらに、社会的リスクテイキング行動の体系的整理は、教育実践や地域社会における安全啓発活動に活用することが可能であり、子どもや若者が「どのような行動を

社会的にリスクと見なすのか」を理解する契機と成り得るだろう。

加えて、社会的リスクテイキング行動が社会全体の信頼や協力の基盤に与える影響を考慮すれば、本研究の成果は心理学領域にとどまらず、社会政策やコミュニティ形成における実践的意義をも持ちうる。例えば、地域コミュニティにおける規範意識の共有や、企業における倫理教育、行政による市民啓発活動などにも応用可能である。社会的リスクテイキング行動の理解は、個人の安全や適応に資するのみならず、協力や信頼といった社会的資本の維持・強化に寄与する可能性を秘めている。総じて、本研究は新しい社会的リスクテイキング行動研究の基礎を築いたといえよう。今後は複数の心理的要因を統合した理論モデルの構築と、異文化間比較や発達段階を考慮した実証研究を進めることで、社会的リスクテイキング行動の抑制メカニズムの解明に迫っていきたい。

引用文献

- Benson, P. L. (2007). Developmental assets: An overview of theory, research, and practice. In R. Silbereisen & R. Lerner, *Approaches to Positive Youth Development* (pp. 33-58). SAGE Publications Ltd.
- Nishimura, T. (2024). A unique variance in future motivation for observed active behaviors on positive class participation beyond the effect of current motivation. *Japanese Psychological Research*, 66(2), 138-153.
- Nishimura, T. (2025). Risk-taking behavior in daily life. 2025 Society for Personality and Social Psychology Annual Convention. Denver, USA, [Poster Presentation].
- 西村多久磨 (2019). 第2章 自己決定理論 上淵 寿・大芦 治(編集) 新・動機づけ研究の最前線 北大路書房
- 西村多久磨・鈴木高志・村上達也・中山伸一・櫻井茂男 (2017). キャリア発達における将来目標の役割：生活満足度、学習動機づけ、向社会的行動との関連から、筑波大学心理学研究、53, 81-89.
- 小塩真司 (2001). 大学生用リスクテイキング行動尺度 (RIBS-U) の作成 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 48, 257-265.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2017). Self-determination theory: Basic psychological needs in motivation, development, and wellness. The Guilford Press.
- 島井哲志・堀毛一也・浦田 悠・一言英文・西村多久磨・小塩真司 (2025). ポジティブ心理学 応用研究の最前線 (6)：ウェルビーイングの充実に向けて 日本心理学会第89回大会 公募シンポジウム

謝 辞

本研究プロジェクトを遂行するにあたって、研究の助成をしてくださった「公益財団法人日工組社会安全研究財団」に深く感謝を申し上げます。

付 記

研究1の内容は、Society for Personality and Social Psychology というパーソナリティと社会心理に関するアメリカの学会が、毎年開催している SPSP 2025 という国際学会で、ポスター発表によって発表されている (Nishimura, 2025)。また、研究3の内容は、日本心理学会第89回の公募シンポジウムにおいて話題提供として紹介されている (島井・堀毛・浦田・一言・西村・小塩, 2025)。

付録A 社会的リスクテイキング行動のリスト (60項目)

【安全軽視行動 (10項目)】	【対人関係リスク行動 (10項目)】
スマホを操作しながら階段を降りた。	交際相手とトラブルや口論になった。
車やバイク、自転車 coming 来ても無理に道路を渡ろうとした。	家族とトラブルや口論になった。
バスや電車が発車しそうなときに、走って乗り込んだ。	友人とトラブルや口論になった。
エスカレーターで立ち止まらずに歩いて移動した。	同僚や上司とトラブルや口論になった。
混雑した場所でスマホを操作しながら歩いた。	SNS上でトラブルや口論になった。
自転車やバイクに乗る時にヘルメットを着けなかった。	感情的に相手を責めたり、衝動的に怒鳴ったりした。
信号が変わる直前に急いで渡った。	相手の意見を頭ごなしに否定し、自分の意見を強く主張した。
横断歩道を渡るときに、周囲の確認を怠っていたことがあった。	SNS上や人前で、他人を批判した。
夜間に自転車に乗る際、事前にライトの点灯可否を確認しなかった。	重要な人間関係が壊れる可能性があっても、対立を避けなかった。
駅のホームや道路の端を歩いた。	会社やグループ、組織のルールに従わず、自分のやり方を貫いた。
【健康阻害行動 (11項目)】	【モラル・マナー違反行動 (10項目)】
暴飲暴食や早食いをした。	ゴミの片づけを怠った。
食事の時間が不規則だった。	遅刻や無断欠勤をした。
ジャンクフードやスナック菓子を多く食べた。	店員に横柄な態度をとったり、過度なクレームをしたりした。
過度な喫煙をした。	決まり事や人との約束を守らなかった。
大量にお酒を飲んだ。	電車やバスの中で、周囲に配慮せずに会話や通話をしてしまった。
極端なダイエットに取り組んだ。	順番を守らずに列に割り込んだ。
睡眠時間を削って仕事や趣味に時間を費やした。	公共施設や共有スペースで配慮が足らずに迷惑をかけてしてしまった。
自分の限界を超える激しい運動をした。	街中や人混みの中を猛スピードで走った。
ケガや病気の兆候があっても、医者に行かず放置した。	混雑した電車やバスで、リュックを背負ったまま乗車した。
自己判断で睡眠薬や市販薬を服用した。	公共の場で化粧や爪切りなど、私的な行動をしてしまった。
徹夜をした。	【スリル希求行動 (10項目)】
【金銭的衝動行動 (9項目)】	危険なスポーツ (スカイダイビング、フリースタイルスキー等) を行った。
衝動買いをした。	夜中に人気のない場所 (廃墟や墓地など) へ行ったりした。
セールや限定品に惹かれて高いものを買った。	絶叫系アトラクションやスリルを味わえる乗り物に乗った。
自分の所持金を超える買い物をした。	高い場所や橋の欄干などで危険なポーズをして写真を撮った。
返済計画を立てずにお金を借りた。	高いところや足場の悪い場所に登った。
オンラインゲームに多額のお金を使った。	外出制限や注意喚起がある中で、不要不急の外出をした。
宝くじやクジ引きなどに多額のお金を使った。	登山やハイキング、川泳ぎなどのアウトドアスポーツを行った。
SNSやインターネットの情報だけを参考に、仮想通貨や株式投資をした。	危険な場所に立ち入った。
ネットショッピングで予定外の出費をした。	暗い夜道を一人で歩いた。
SNSや広告で見かけた商品を、よく考えずに購入した。	計画を立てずに遠出や旅行に出かけた。